臨床教育学講座2004年度授業科目一覧

［学部提供科目］

■臨床教育学基礎演習Ⅰ（矢野智司）

教育人間学・臨床教育学と関わる現在の人間学的論考を読み、人間を取り巻くさまざまな問題事象に目を向け、それを題材にして議論する。人間学的な見方とは何かを学ぶ入門的な授業である。鷲田清一『悲鳴をあげる身体』（ＰＨＰ新書）・中村雄二郎『臨床の知とは何か』（岩波新書）のテキストを予定している。それぞれのテクストは短いものではないので、授業がスタートするまでに読み終えておく必要がある。

■臨床教育学基礎演習Ⅱ（斎藤直子）

今日の日本の教育改革における諸々の動きや、そこで語られる言語を批判的に再吟味するためのひとつの視点として、ジョン・デューイのプラグマティズムに基づく、進歩主義教育思想、および、「生き方としての民主主義」の思想の現代的意義、およびそれらの問題点を考察する。教育理論と実践の関係、「知識」や「経験学習」の意味、カリキュラムの諸形態、教師と生徒の関係性、民主主義と教育の関連性などの諸観点から議論を行う。

教育哲学のテキストに対して、参加者ひとりひとりが、各人の教育に対する問題意識や経験に基づき、対話的に取り組むというアプローチを取る。授業の形式は、学生の発表とディスカッションを中心にする。評価は、出席、発表、および、レポートに基づく。

■臨床教育学購読演習Ⅰ（斎藤直子）

テーマ：市民性の教育

内　容：日本、アメリカ、イギリスなどにおける市民性の教育に関わる文献を購読する。自己と国家の関わり、国家の市民であることと世界の市民であることの関係性、愛国主義などの議論を通じて、自己変容とインターパーソナルな関係性を起点とした社会参加を可能にするような教育の可能性を探る。英語の文献購読および、ディスカッションを中心に行う。

評　価：出席、発表、レポートに基づく。

その他の注意事項：通年での履修が望ましい。

■臨床教育学購読演習Ⅱ（斎藤直子）

テーマ：市民性の教育

内　容：前期と同じ。臨床教育学購読演習Ⅰを履修していることが望ましい。

評　価：出席、発表、レポートに基づく。

■臨床教育学専門ゼミナールⅠ（斎藤直子・矢野智司）

テキストと対話的に関わりつつ、自己の主張、自己の声を反映させるような論文をいかにして書けばよいのか。本演習では、臨床教育学という分野において卒業論文を「書く」ということをテーマに、論文を書くための作法をトレーニングし、その過程で、自分なりの執筆のスタイルを獲得してゆくことを目指す。授業では、論文を書くための一般的な知識を基に、諸々の論文の書き方のサンプルや、参加者各人の書いたものを皆で批評し合うなどの手法を取りながら、論文の書き方の他用な可能性を実践的に探ってゆく。

■臨床教育学専門ゼミナールⅡ（矢野智司・斎藤直子）

教育を例えば教えることと学ぶことの相互作用（交換）として捉えたとき、すでにその相互作用が成り立つ場が前提にされている。しかし、どのようにして教えることと学ぶことの交換の場が成立可能なのかが問われることがない。この交換が機能しているときはもとより機能しないときですらこの交換の原理は疑われることがない。それというのも、教育＝交換が機能しないときにも、教育学的思考法は自動運動のごとくどのようにすれば教育的な機能（交換）を回復することができるのかという問いへ移り、かえって交換の原理の自明性を強化してしまうからである。

この交換という原理自体を一度括弧に入れてみよう。そうすると「先生」と呼ばれ「生徒」と呼ばれている者の間に、交換に回収することができない事象が見えてくるようになる。「贈与」と呼ばれている事象がそれである。例えば、ツァラトゥストラがなしたように、教えるということが同時に贈与であるような事象が教育に生起している。この贈与という事象は、これまで教育学でほとんど問われることのなかった人間学的事象である。贈与と交換という問題関心から従来の教育学のテクストを読み直すなら、古典的なテクストの内にもその記述を見つけることができるが、その差異を際立たせ主題化されてはこなかった事象という

方が正確かもしれない。しかし、この贈与は教える－学ぶの交換型のコミュニケーションではない教える－学ぶの新たな次元を明らかにするのである。

このような視点から、贈与と交換に関するさまざまなテクストを読んでみよう。そして議論してみよう。なおこの授業は卒業論文の指導もかねている。臨床教育学講座で卒業論文を書く予定の学生は必ず出席するように。

■教育人間学概論Ⅰ（矢野智司）

君たちが受けてきた学校教育は、君たちにとってどのような経験だっただろうか。自分がいちばん変わったというのは、どのようなときだっただろうか。それは教育の成果といえるのだろうか。自分の教育経験を振りかえりながら、一歩一歩「教育」という言葉にまとわりつく、重苦しい生命を失った言葉の鎖をとりのぞき、教育という世界に生命の風穴を開けていこう。

そのためには、遊び・メタファー・ユーモア・贈与といった具体的な人間の生の変容の論理を学ぶとともに、教育という世界を生み出している理念、そしてその歴史と思想の学習が不可欠である。そのような教育の理念や思想を再吟味しながら、生命にあふれた人間の生の変容の可能性を論じる。

■教育人間学概論Ⅱ（矢野智司）

生成と発達の教育人間学：自己に対立する課題を克服するやりとりを「経験」と名づけ、「経験」することによって自己がより有能なものへと漸次成長していく過程を「発達」と呼んでみよう。そして、自己が自己と世界との境を失い溶解する在り方を「体験」と名づけ、「体験」によって自己が変容する瞬間の在り方を「生成」と呼んでみる。最初の系は、普通「教育」と呼ばれているもので、基本的には共同体の内部で成熟した大人になっていく人間の変容を言い表している。後の系は、「喜びにあふれる遊戯」や「非知に触れるノンセンス」や「純粋贈与者との出会い」あるいは「野生の動物との出会い」にみられるように、共同体の外部へと開かれてきた生きたものに触れていく変容の在り方を示している。戦後日本の教育学は、「発達」を目的とする人間形成について探求してきたが、この二つの系を手がかりに、「教育」と呼ばれる事象について考えてみることにする。

［大学院科目］

■臨床教育学研究Ⅰ（矢野智司・斎藤直子）

臨床教育学と臨床教育人間学の基本文献、古典的文献を精力的に読む。また、博士論文作成に向けての指導を行う。

■臨書教育学研究Ⅱ（矢野智司・斎藤直子）

臨床教育学と臨床教育人間学の基本文献、古典的文献を精力的に読む。また、博士論文作成に向けての指導を行う。

■臨床教育学演習Ⅰ（矢野智司・斎藤直子）

Paul Standish, *Beyond the Self: Wittgenstein, Heidegger, and the limits of language* (Aldershot: Ashgate Publishing Group, 1992) を購読しながら、言語の可能性と限界、自己超越と他者性の倫理、それらの教育的意義について議論を行う。

■臨床教育学演習Ⅱ（皆藤章・大山泰宏・斎藤直子）

教育学に限定されることなく、人間の営みを探究してきた、哲学、文化人類学、民俗学、社会学、宗教学、心理学などのさまざまな学問領域の「語り」との対話を試み、それをとおして展開される地平を主体的に「語る」ことから、「人間とは何か」「『生』とは何か」「人間を知る」というテーマを、臨床教育学の問いとして引き受けることを試みる。

授業の最初の回に、発表者のスケジュールを決定し、発表者は予定された回にそれぞれの興味・関心領域から上述の内容に即した発表を行って、その後ディスカッションをしていく。したがって、発表の素材は基本的に受講生が見出すことになる。なお、修士一回生は卒業論文（提出論文）内容とそこからの展開について、博士一回生は修士論文（提出論文）内容とそこからの展開についての発表を基本とする。

■子どもの人間学演習（矢野智司）

一切の見返りを期待しない純粋贈与という事象は、これまで教育学で問われることのなかった人間学的事象である。しかし、この事象は、共同体内部の同質性を基にした仲間同士の倫理ではなく、共約できない異質性を前提とする共同体外部の他者との倫理に関わる事象である。つまり差別と排除を乗り越える可能性にかかわる事象でもある。したがって、私たちが

他者との「共生」ということを教育の課題として真剣に考えるなら、当然、純粋贈与は考えなければならない事象といえるだろう。文学作品・児童文学・絵本などを手がかりに、子どもの世界における贈与と交換について、教育人間学の立場から考察する。

■学校臨床学演習（皆藤章・桑原知子・矢野智司）

基本的に、受講者が発表する「事例」を検討することを中心に進めていく。本演習での「事例研究」は、臨床心理学が伝統的に行ってきたスタイルをかならずしも意味しない。学校現場で生じているさまざまな事態そのものが「事例」であるという認識に立って、学校現場における生徒との個々のやりとりから、広く学校という人間集団が抱える場の機能に到るまで、裾野を広くとって実践的な議論を行っていきたい。いわば、「学校」がひとつの「事例」であるという視角である。

本演習は、守秘義務などの倫理規定の遵守を必要とするため、受講希望者は、あらかじめ担当教官（皆藤章）の了承を得ること。また、受講に当たっては、希望者は全員、事例を提供できることが必要となる。

■臨床教育学課題演習Ⅱ（藤川信夫：大阪大学助教授）

〔演習の内容〕優生学的知識ないし優生思想は、大正期にいわゆる新中間層の間に浸透し、教育学をはじめとする様々な学問分野においてその是非を巡る議論がかわされてきた。そして今日、いわゆる「試験管ベイビー」の誕生以降の生殖補助医療の発展と浸透、出生前診断に基づく選択的中絶に代表される診断技術の発展と浸透、さらにはヒトゲノム計画の展開と背景として、優生学論議は再び活発化しつつある。そこで、この演習では、教育（学）との関係に焦点を当てながら、新旧の優生学論議のなかからいくつかのテキストを取り上げ、論議の歴史を跡づけるとともに、今後の議論の行方についても考察する。

〔演習の進め方〕各回数本の論文を選定し、これについて参加者が作成したレジュメをもとに討論を行う。

〔評価〕演習への参加度及びレジュメをもとに評価を行う。

■臨床教育人間学特論（松下良平：金沢大学教授）

教育への高まる期待と教育のゆきづまりが表裏一体の関係にあるとき、教育に関する諸問題は教育そのものを問い直さなければ解決できない。このような見通しに立って、合理的な

人づくりとしての教育の論理と現実を、人間的生の様式という観点から批判的に考察する。教育の論理を支えている思想的・社会的背景および教育の意図せざる帰結に照らして教育の限界を見定め、さらには人間の活動様式や現代社会の特質を考慮しながら、教育のオルタナティヴについて探究を試みたい。とりわけ、教育のオルタナティヴとしての「学び」論の妥当性をめぐる問題（近年のさまざまな学習論・学び論の比較検討を含む）に焦点を当ててみるつもりである。

受講者がそれぞれの視点から議論に積極的に参加することを期待したい。

■臨床教育学特論Ⅱ（川本隆史：東京大学教授）

ジョン・ロールズの『正義論』（1971年）に始まる規範的社会理論の展開とキャロル・ギリガンの『もうひとつの声』（1982年）が対抗的に打ち出した「ケアの倫理」とを対質させながら、教育における正義とケアを統合する可能性を探っていきたい。

まず「正義対ケア」の論争を概観した上で、教育哲学者ネル・ノディングスの理論的営為の検討に進む。彼女は、ギリガンにおいて「苦しみの緩和」、「ニーズへの応答」として一方通行的に特徴づけられていた「ケア」を、「ケアリング」という動名詞の相のもとでダイナミックに捉えかえし、ケアリングの観点から道徳教育の組み換えを図ろうとした（『ケアリング』1984年）。さらに『スターティング・アット・ホーム』（2002年）では、リベラリズムに領導されてきた従来の社会政策の限界を突破し、「ケアし合う社会」の構想を大胆に提起している。

そうしたノディングスの試みを、現代日本の社会的文脈にてらして吟味したい。